

労働と政治の〈現在〉史にむけて —模擬授業「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学」の再演と その振り返りをとおして—

Toward a History of the Present in Labor and Politics: Political Economy of Kuu, Neru, Asobu (Eat, Sleep and Play)

大川 正彦

OKAWA MASAHIKO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.20 (2018), pp.175-186.

目次

はじめに

1. 喰う・寝る・遊ぶの政治経済学

1-0. 「くう・ねる・あそぶ」のかつてといま

1-1. 「喰う・寝る・遊ぶ」を〈ひととひとのあいだ〉〈人間と自然のあいだ〉で捉える

1-2. Agent and Patient としてのニンゲン——身心魂の activity と passivity の起点にある躰

1-3. 隣人とは誰のことか？

2. 「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学」Afterthoughts

2-1. 基本動詞という発想について

2-2. 三つの基本動詞のそれぞれの様態、背景事情、場

2-3. 大きな課題、小さな場所からの

3. むすびにかえて——労働と政治の〈現在〉史を拓く

はじめに

「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学——どこまで行けるか？」——2017年7月、東京外国語大学オープンキャンパスで開かれる模擬授業として、このタイトルで高校生むけに話す機会があった。夏前に模擬授業へのお誘いを頂いたとき、「くう、ねる、あそぶ」という言葉がふとあたまのなかをよぎった。これなら、わたしが考えてきたこと、考えあぐねてきたことを集約的に高校生たちに訴えかけることができるかもしれない、とおもいついたからだ。その後、授業の準備をするなかで、「くう、ねる、あそぶ」ということがらがとてつもない問題を孕んでもいることをいまさらのように知

らされ、いくぶんかは茫然自失しながら、ともかくも訴えたいこと、こうも考えられないだろうか、ということを経験に盛り込むことにした。じっさいの授業では、参加者との問答におもいのほか時間を割いてしまったためか、用意していたことの半分にも満たないことしかできなかった。だが、参加者からいただいたコメントシートというかたちでの応答を読むかぎり、それなりに持ち帰っていただく何かを提供できたようにおもえた。授業じたいでは、その内容をかいつまんだレジュメと、関連資料を配布した¹。

小文は、この授業を再演しつつ、その後に振り返ったことがらを掘り下げることのひとつのねらいとする。今後探究されるべき課題の確認という意味合いになろう。それとともに、もうひとつのねらいとして、わたし自身がこれまで前提してきた基本的な枠組みを、この間の作業の振り返りをとおして、建て直す方向を見定めてみたい。こ

¹ 関連資料としては、その後の学習のためという意味も兼ねて、以下を配布した。大川正彦『思考のフロンティア正義』（岩波書店、1999年。以下、『正義』と記す）冒頭部分からの引用、佐藤幹夫監修／NPO法人 自立支援センターふるさとの会 的場由木編・著『「生きづらさ」を支える本——対人援助の実践の手引き』（言視舎、2014年）の目次、大川正彦『哲学のエッセンス マルクス——いま、コミュニズムを生きたら？』（NHK出版、2004年。以下、『マルクス』と記す）からの引用、そして、清水真砂子『もうひとつの幸福——挫折と成長』（シリーズ——生きる）（岩波書店、1994年）からの引用。——当日の授業では、この配布資料は説明することができなかった。



れまでわたしが提示してきた問題群をなにがしかのかたちで読み知った人びとへの、現段階での中間報告という含みもあると期待できる意味では、なんらかの公的な意味合いもあるだろう、とおもう²。政治学徒であるだけではなく、政治博徒³——政治を語ることばの解きほぐし、そのことをとおした博打を事とする「学徒」——たらんとするものとしては、己がつかう「政治」やら「労働」やら「社会」やらを語るさいの語彙・文法——ある種の深層に潜む語彙・文法に身心魂⁴ともども乗っ取られて呪文をかけられて語らされているだけなのかかもしれない——の点検、わたしたちがつかう語彙・文法の日常批判・日常生活批判⁵をこそめざそうとおもう。その日常批判を、さしあたり、労働と政治の〈現在〉史⁶と呼んでおきたい。

² この小文の宛先として、外大卒業生、現役生をも含んだ、この学問共和国を念頭においている。

³ 「政治博徒」の範として仰いでいるのは、精力的に、さまざまなかたちでの政治学原論を世に問いつづけている、岡田憲治の一連の仕事である。通常は政治学としてカウントされないかもしれないが、まがうことなき政治学原論の一書として、『働く大人の教養課程』（実務教育出版、2012年）をあげておく。

⁴ 政治学としてどう捉えられるのかは、いまだ検討していない。心身問題(mind and body problem)などの領域を超えて、英語の日常表現での body and soulなどを念頭において、また、霊性(spirituality)の次元もふくめて、〈ひと〉を捉えることを際立たせたい。いまはいないひと、いまだ生まれざるひととの〈あいだ〉のなかで、いまいるひとびとを捉えるという年来の課題に応えるには踏み込まざるをえないのではないかと、とおもう。

⁵ わたしたちの語彙・文法が網の目としてわたしたち自身の「欲求・信念」を形づくっているというあたりの事情については、リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯——リベラル・ユートピアの可能性』齋藤純一・山岡龍一・大川正彦訳（岩波書店、2000年）を参照のこと。ここで日常批判・日常生活批判というさいの批判の根っこは天上にあるわけではない。批判という語も吟味という意味、矯めつ眇めつ味わい直す、“美味しいとおもっていたけれど実は不味い”と気づいたら口にするのを控える、近づかない、バイヤーの近くにも寄らない、など、といった意味で使われている。いずれにせよ、死んでいるのなら戻ってきてしまう日常がある。

⁶ 〈現在〉史ということで、ここでは、ロベール・カステル『社会問題の変容——賃金労働の年代記——』前川真行訳（ナカニシヤ出版、2012年）での、〈現在〉のプロブレマティクスを問う営みを範としている。なお、カステルの一書をテキストとして、東京外国語大学総合国際学研究所のいわゆる院ゼミで“遅読”をしたが、そのさいの院ゼミ参加者との（議論ではなく！）チャットに多くを負う。とりわけ日本近世史学などにおける「労働と身分的周縁論」、汚い、屑拾いをはじめとする都市を支える

1. 喰う・寝る・遊ぶの政治経済学

本節では、模擬授業の再演をおこなう。節立ては、模擬授業で配布したレジュメにしたがう。授業ではあるまじきかたちかもしれないのだが、問い、主張、論証という手続きよりも、問いの見立てと、見立てられた問いを掘り下げてゆく方向の指し示しに終始していた——つまりはただただ（説得ではなく）挑発 provocation につとめていた——ようにおもうが、ここでもそのまま展開しておく。あえて大胆な加工はほどこさない。

1-0. 「くう・ねる・あそぶ」のかつてといま

「くう　ねる　あそぶ」という言葉をふとおもいついたことは、「はじめに」でも述べた。自らの記憶が不確かなものだから、インターネットで調べ直してみると——学徒としてはあるまじき振る舞いではある——、日産セフィーロのCMとして、1989年に放映されていたことが明らかになった。出演は井上陽水。そのときのキャッチコピーとして使われていたのがこの文言。車の宣伝であることは忘れていたが、コピーの作者は、その当時の時代の寵児、糸井重里。わたし自身の当時の受け止め方としては、浅薄ながら、高度消費資本主義を後押しするような、いわゆるバブル経済まっただなかのお気楽な宣伝文句というものであった⁷。そのような、少しばかりふざけた感覚が、模擬授業のお誘いをいただいたときに同時にあったことは否定できない。しかし、ネットを見ていて、驚かされたのが、この文言をおそらくは踏まえつつ、NHKが「くう　ねる　あそぶ　こども応援宣言」という「宣言」のもと、番組を製作している事実だった。あの明るい、すこしふざけた「くう　ねる　あそぶ」が、いまでは切迫性の高い問題群、「子どもの貧困」を象徴する言葉として再利用されているということ。このことをどのように受け止めたらよいのか。——このような問いかけを模擬授業の主題に据えようと、あらためて組み立て

生業などという論題について。

⁷ 高度消費資本主義を後押しするような、お気楽な宣伝文句としてしか受け止められなかったのは、当時のわたしの幼さなのかもしれない。そこには何らかの批評性が胚胎していたのかもしれない。この国における80年代論と接続して考察できる事柄がいくつか含まれているようにもおもえる。

直すことになった。

「子どもの貧困」ということについては、阿部彩『子どもの貧困——日本の不公平を考える』（岩波新書、2008 年）の刊行が象徴する、「子どもの貧困元年」2008 年を経て、さまざまな方面で取り組みがなされてきている。もちろん、人びとの注目を浴びなくとも地道に続けられてきた営みがこの間あらためて注目を引き、その実践的な意味が他地域でも共有されるということもあったのだろう。ともあれ、NHK の「くう ねる あそぶ こども応援宣言」によって、この「宣言」じたいの問題感覚を確認しておこう。

～くう ねる あそぶ こども応援宣言とは～思い切り遊び、おなか一杯食べて、ぐっすりと眠る。日本では今、そんな当り前のことがままならない子どもたちが少なくありません。共働きやひとり親家庭の急増など、家族のあり方や生活スタイルが大きく変わる中、親だけの力で子どもを育てることが難しくなっています。発達や成長に欠かせない「食べる、寝る、遊ぶ（学ぶ）」機会をどうしたら守ることができるのでしょうか。「くう ねる あそぶ～こども応援宣言」では、子どもたちの声に耳を傾けながら、私たち大人に何ができるのかを考えていきます。そして様々な問題の解決に向けて、当事者である子どもや親たちの助けとなる情報を発信するとともに、一人でも多くの人々の知恵や活動をつなぎ、子どもが安心して暮らせる社会をみんなで生み出していきたいと願っています⁸。

この宣言じたいを考察の対象とすることはしない。もちろん、学的検討の対象とすれば、さまざまな方向性が得られるであろう。むしろ、ここではあえて次のように言い切っておきたい。子どものいのちの問題は重要である。そのことは否定しない。むしろ、どのような意味で重要なのかをあらためて考え抜くことも重要であろうが、ここでは踏み込まない。しかし、子どもだけ、の話なのだろうか。想像力を列島社会以外に拡げてゆけば

なおのことだが、ほんとうのところ、何が問題なのか。そして、どのように対処したらよいのか。——そのことを少しばかり考えてみるために、以下、三点にわたって論点を押し出し、問題群の確認をしておこう。第一に、「喰う・寝る・遊ぶ」を〈ひととひとのあいだ〉〈人間と自然とのあいだ〉で捉えること⁹。第二に、Agent and Patient としてのニンゲン（身心魂の activity と passivity の起点にある軀）¹⁰。第三に、隣人とは誰のことか？¹¹

1-1. 「喰う・寝る・遊ぶ」を〈ひととひとのあいだ〉〈人間と自然のあいだ〉で捉える

政治や社会の場を考えるさいに折に触れて、問題感覚の息吹きを与えられ、またあるときは読み返すことで与えられなおしてきた鷺田清一の仕事を、ここでも引き合いに出さざるをえない。少々長いが、「喰う・寝る・遊ぶ」を右の視角からとらえるさいに、そこにある軀に注目するしぐさを受け継いでおきたい。

なにか少年や少女の事件が起こるたびに、こころのケアやこころの教育がどうのといった声があがるが、私はすぐにはそういう発想がとれない。ちょっと乱暴かもしれないが、お箸をちゃんともてる、肘をついて食べない、顔をまっすぐに見て話す、脱いだ靴を揃えるなどということができていれば、あまり心配ないのではないかと思ってしまう。あまのじやくなわけではないが、とりあえず、ごはん

⁹ この論点の突き出しについては、『マルクス』を参照。この視座からの重要な試みとして、菅豊『川は誰のものか——人と自然の民俗学』（吉川弘文館、2005 年）がある。真の意味で政治学原論の名に値する試みであるとおもう。洋風の政治学とは異なって、民俗学をも積極的に受容しながら、あるいは民俗学への応答も兼ねながら独自の政治学の構築を試みようとした仕事として、神島二郎、京極純一のお二人の名前をここでは挙げておきたい。もちろん、そこには橋川文三の存在も忘れてはならないが。このような学的営みの伝承・再継承という方向を、わたしも受け継いでみたい。

¹⁰ このことについては、とくに、拙稿「悪・暴力・不正義——暴力批判としてのフェミニズムの視点から眺める」（日本法哲学会編『法哲学年報 2003 ジェンダー、セクシュアリティと法』有斐閣、2004 年、所収、7-18 頁）、そして『マルクス』を参照のこと。

¹¹ この問いかけは、「よきサマリア人のたとえ」はもちろん、大庭健『他者とは誰のことか——自己組織システムの倫理学』（勁草書房、1989 年）、を念頭においている。

⁸ <http://www4.nhk.or.jp/kodomo-pj/>（最終閲覧：2017 年 7 月 7 日）

はかならずいっしょに食べるようにしたら、
 と言ってみたくなる。なにか身体が覚えた智
 恵や想像力、身体で学んだ判断を信じたいと
 思うのだ¹²。

なにか身体の深い能力、とりわけ身体に深
 く浸透している智恵や想像力、それが伝わら
 なくなっているのではないか。あるいは、そ
 ういう身体のセンスがうまくはたらかないよ
 うな状況が現われてきているのではないか。
 ／そんな身体からなにやら悲鳴のようなもの
 が聞こえてくる気がする。身体への攻撃、そ
 れを当の身体を生きているそのひとが生きて
 いるそのひとがおこなう。化粧とか食事とい
 った、本来ならひとを気分よくさせたり、癒
 したりする行為が、いまではじぶんへの、あ
 るいはじぶんの身体への暴力として現象せざ
 るをえなくなっているような状況がある¹³。

鷺田じしんが上に引いた文章の続きで述べてい
 ることばを使っていうなら、「現在の身体が抱え込
 んでいる痛みと希望」¹⁴を、〈ひととひとのあいだ〉
 〈人間と自然とのあいだ〉で捉えなおしてみた
 ときに、どのような事柄がそこに浮かび上がって
 くるか。「喰う・寝る・遊ぶ」という事柄に差し戻し
 てみると、どうなるのか。さしあたり三点にわた
 って指摘しておきたい。

第一に、人間の身体が外から何かをとりいれ、何
 かを排泄せざるを得ないということ。インプット、
 食が確保されていること、食の安全の話も重要で
 はあるが、同時に、そのような食が確保されてい
 るとして、尿尿流通、尿尿処理、下水道整備、な
 どのインフラもまた重要な課題としてその場には
 あるにちがいない。と同時に、ここでも拙速を顧
 みずに踏み込めば、屑拾いなどの仕事、そしてこ
 の仕事に従事してきた人たち（その歴史）もまた
 あわせて考えてよいのではないか。——生産（そ
 して消費）だけに注目した社会像ではなく、（消費
 の後に残るはずの）廃棄、再利用、修繕(repair)¹⁵に

も注目した社会像から、件の事柄を捉え返す必要
 がある。

第二に、寝る場所、安心して寝られる場所、住
 みか、休息、呼吸のこと、がある¹⁶。政治学やら
 政治理論やらの言葉づかいのなかでは、そのよう
 な「安楽さ」の追求はケシカラヌ事柄だとされか
 ねないが、「悲鳴をあげる身体」がどこで悲鳴をあ
 げているかを考えてみればよい。

そのようなホーム——ファミリーでもハウスで
 もなく！¹⁷——が確保されたとしても、その場を、
 〈ひととひとのあいだ〉ばかりではなく、〈人間と
 自然とのあいだ〉でもとらえるのなら、外気を吸
 い込まざるをえないこと、その意味での絶対的受
 動性が浮かび上がってこざるをえない¹⁸。

第三に、ホームの話ともある部分かわるが、
 飢え・渇き¹⁹、不眠、不休という問題群がある。
 おおかたのばあい、世俗的な次元に徹する政治学
 や倫理学では落とされがちではあろうが、たんに
 身体の問題であるだけではなく、そこに（垂直に？）
 貫かれる身心魂の次元の問題。休まらない身体はな
 ぜ休まらないのか。この次元にかかわっては、こ
 んな問いかけが問題になろう。

このような三つの論点を差し挟んでみると、身
 体／身体がなんとかはたらく、動く、だからこそ疲
 れ、休まる、そして起きるというサイクルがとて
 も重要な事柄であることが、当然ではない当然事
 として浮き彫りにされてこないだろうか。鷺田は

構想する営みとして、Elizabeth V. Spelman, *Repair: The Impulse to Restore in a Fragile World* (Beacon Press, 2003)が
 あげられるが、彼女の考察を、〈ひととひとのあいだ〉で
 だけではなく、〈人間と自然とのあいだ〉に埋め込みなお
 す必要があるようにおもう。今後の課題としたい。

¹⁶ 「寝る場所、安心して寝られる場所、住みか、休息」
 については、『正義』を、「呼吸のこと」については、『マ
 ルクス』を参照。

¹⁷ 政治理論での問題提起としては、Iris Marion Young,
 “House and Home: Feminist Variations on a Theme”, in: *do.,*
Intersecting Voices: Dilemmas, Political Philosophy, and
Policy (Princeton University Press, 1997), pp.134-164.

¹⁸ 〈始原的なもの〉に対する受動性という論点について
 は、熊野純彦の一連のレヴィナス論から大きな示唆を得
 てきた。とりわけ、熊野純彦『レヴィナス——移ろいゆく
 ものへの視線』「第Ⅰ部 所有することのかたへ——レ
 ヴィナスにおける〈倫理〉をめぐる」(岩波書店、1999
 年)〔2017年、岩波現代文庫、に収録〕。

¹⁹ 『正義』「Ⅱ 分かち合い、分かり合い、その在り難さ・
 在りえなさ」「第3章 ニーズということ、権利というこ
 と； 1よく生きるということ； 2人間に特有な空虚さ
 と不完全さ」を参照。

¹² 鷺田清一『悲鳴をあげる身体』（PHP 新書、1998年）、
 3頁。

¹³ 同、4頁。

¹⁴ 同、6頁。

¹⁵ 「繕うひと Homo reparans」という視点から政治社会を

言う。

現実がその核に遊びという契機をもっていることは、現実の虚構性であるとともに、さまざまな不意の状況で一人ひとりがその対応をさまざまに柔軟に変換できるというプラスチックなありかた（可塑性ないしは弾力性）を現実が含みもっているということでもある。先にわたしたちが、現実というものがばらばらに分散しながら凝集し、ぼろぼろと脆くこわれてしまうものでありながらある程度のまとまりを有すると言ったのも、現実というもののそういう可塑的な性質をさしてのことである²⁰。

いささか連想ゲームじみてはいるのだが、ここでいわれている「遊び」を、それがなかなか手に入れられていない身体／軀にどのように回復できるか、この問いが、「喰う・寝る・遊ぶ」の軸になってこざるを得ない脈絡が現にあるようにおもわれる。

1-2. Agent and Patient としてのニンゲン——身心魂の activity と passivity の起点にある軀

当日のレジュメをみても、Agent and Patient ということについては何の説明もできていなかった。わたし自身がこれまでにこの概念対をめぐる書いてきたことを前提にして、この場での文脈にあわせて簡単にでも書き込んでおけばよかったと振り返る。端的にいえば、身体／軀があるかぎり、はたらきかけの側面とはたらきかけられ／こうむりの側面、よく使われる言葉づかいでいえば、能動の側面と受動の側面との双方を込みにしてこそニンゲンなるものは十全にとらえられるだろう、ということである。あまりにも当たり前なことなのに、どういうわけか、とりわけ政治理論という業界などでは、主体性といえ、それだけが突出して agency なる用語が乱舞したり、かたや受動性の強調となると、vulnerability なる用語が飛び交ったり、ということがままあるようだ。わたし自身もそのような事態への共犯者でもあったかもしれ

ないだけに、自戒をこめて一言付しておきたい²¹。

前項でみたことを前提としたうえで、ここでは、以下の論点を提起してみたい。

第一に、汐街コナ『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』²²が提起する問題。模擬授業が設定した文脈では、以下のような問題として受け止められるのではないか。すなわち、「食べてばかりいないで、寝てばかりいないで、遊んでばかりいないで、もう少し勉強したら、仕事したら、もっと働いたら、……」の正しさ（の強制）として。たえずひたすらに能動的であることを強いられ、ひとは疲れるということがないことであるかのように、つまり受動的な存在であることがその当の身からも消去されることを求められ、その果てに、という事態として、ここでは受け止め返すことができるのではないか。なぜ、この身じしんが身の程知らずにもこの身が身であることを消去するような衝動へと駆り立てられて能動的であらねばならないのか。問題は当然にもポリティカル・エコノミー＝ポリスのエコノミーの領域に踏み込むことになるだろう²³。

第二に、そのうえでなお、「働かざる者食うべからず」のまっとうさと不具合を考えざるを得ない。働くこととしてカウントされることが何であるにせよ、そのときのハタラキにそれ相応の対応があってしかるべきなのは言うまでもないのだが、この、長きにわたって言い古されてきた日常直観・コモンセンスがバランスを失うと、日常そのもの

²¹ Vulnerability（傷つきやすさ）という論点をめぐっては、かならず「傷つけやすさ」、すなわち有形無形の暴力もしくはは暴力行使と表裏一体にして考察してきたつもりではある。『正義』II 分かち合い、分かれ合い、その在り難さ・在りえなさ」「第2章 不正義ということ； 1 傷つきやすさ、傷つけやすさ」を参照。この語が、「脆弱性」「被傷性」と訳されることもあるが、「攻撃誘発性」と訳されることもあると知ったときの驚きはなかなかなくなる。

²² 汐街コナ『「死ぬくらいなら会社辞めれば」ができない理由』（あさ出版、2017年）。

²³ 『マルクス』はもちろんのことだが、古くは、拙稿「解題『解釈としての社会批判』をめぐる——オンリー・コネクト……——」（マイケル・ウォルツァー『解釈としての社会批判』大川正彦／川本隆史訳、ちくま学芸文庫、2014年、所収、171-203頁〔初刊は、風行社、1996年〕）、拙稿「分かち合いの自由、その共同的成就の有りがたさ」（千葉眞・佐藤正志・飯島昇蔵編『政治と倫理のあいだ——21世紀の規範理論に向けて——』昭和堂、2001年、所収、202-218頁）を参照のこと。

²⁰ 鷲田、前掲書、174頁。

を破壊するような凶器にすらなるのではないか。この直観が直観としてそれなりに生き生きとして、あえて語られることもなくただ従われていた場合には、そのようなバランスを支える別の語り草、仕草がしたたかに存在していたのかもしれない。困り事があるときの「お互いさま」や「情けは人の為ならず」など。いまは、それを表だっている力はないが、問題点として登録しておきたい。

働く身体に焦点をあわせてみると、〈ひととひとのあいだ〉〈人間と自然とのあいだ〉の不調(disorder)が、どのようにしてか、身体の(じっさいには身心魂ぜんたい——日本語で言う「身」(み)にあたるか——に及ぶ)不調としてあらわれるのか。ここにおいても、鷺田が指摘していた、「遊びという契機」をこの問題のなかで確保することが重要となる²⁴。

第三に、すでに述べた(とりわけ第二の)論点とも重なるが、隣人の「喰う・寝る・遊ぶ」自由と、〈わたし〉の「喰う・寝る・遊ぶ」自由との関わり、関わりなさ。NHKの「くう ねる あそぶ こども宣言」が想定していたような状況では、誰かが「喰う・寝る・遊ぶ」を満喫することは、別の誰かがケアすること、支えることと考えられてもいよう。もちろん、そのようなこともあるが、そうしたいわば非対称的な間柄のあいだでも、ケアする側の、支える側の「喰う・寝る・遊ぶ」の満喫・自由も同時に大事なことではあろう。そちら側の遊びの余地がなければ、共倒れになってしまいかねない。個人と個人を別個バラバラに考えることに馴染んだ「芸風」の方々のばあい、そうした個々人の満足追求、自由への希求は相互衝突するとされることが多い。

その種の言語ゲーム——これもまた「遊び」ではあろう——から離れてもっと遊んでしまうと、

²⁴ 汐街コナが描く世界のなかで、「辞め」られないとしても、サボることはどれだけできるのか。殺されない程度には働いているようにみせかけつつ、テキトーにサボりながらハタラキつづけることはいかにして可能か。模擬授業のなかで、こうしたことを問かけようとおもってはいたが、授業の性格を鑑みて、控えてしまっていた論点であったことを、いま思い出す。お気楽な問かけかもしれないが、この種のミニマリズムの実践は、以前にもましてさまざまに実験・実行されているようにおもえる。理論、つまりは、ことばによる問題の見立ての領分が追い付いていないだけなのかもしれない。

相剋としてではなく、相乗として捉える理路があるだろう。古くは、見田宗介／真木悠介が欲望の相剋、相乗として語っていたものかもしれない²⁵。ここでは、その側面よりも、じっさいに、外部からはケアする、ケアされる、もしくは支える、支えられると記述されるような状況での、いくつもの軀たちのあいだで可能となってしまう事態に注目したい。かつて、わたし自身「分かち合いの自由の共同的成就」²⁶と呼んだものだ。そこから、隣人と〈わたし〉との「喰う・寝る・遊ぶ」における共歓・共苦という問題を浮かび上がらせ、その場での共同の問題として対処するという実践に、丁寧に言葉を与えることができまいか²⁷。

第四に、共歓、共苦するという側面から、つぎには、共にいたみ、いたわる、という問題圏が拓けてくる。この、いたみ、いたわる、というさいの、「いたみ」には、「傷み／痛み／悼み」という三つの重層的な・重なり合う事柄が含まれているだろう²⁸。このあたりの問題圏にはひとまずは語源学的なアプローチも必要なのかもしれないけれども、それとあわせて、さまざまな実践をそのひとつでも追いつかない言葉で追いかける努力が払われるに値するにちがいない²⁹。

²⁵ 見田宗介「コミュニンと最適社会」(『定本 見田宗介 著作集 VII 未来展望の社会学』、岩波書店、2012年、所収、106-168頁)。(初出は、『展望』筑摩書房、1971年2月号。のちに、真木悠介『人間解放の理論のために』(筑摩書房、1971年)に収録。)

²⁶ 前掲拙稿「分かち合いの自由、その共同的成就の有り—がたさ」。

²⁷ 政治学者・精神史家である藤田省三が生前注目されていた霊長類学者・人類生態学者の伊谷純一郎の仕事、たとえば『霊長類社会の進化』(平凡社、1987年)がある。その伊谷の仕事の批判的継承にも分厚い蓄積があり、そのなかには、現代政治理論の動向にも周知な目配せをした、寺嶋秀明『平等論——霊長類と人における社会と平等性の進化』(ナカニシヤ出版、2011年)がある。とりわけ食物の分かち合いについては、詳細な考察を施す、黒田末寿『人類進化再考——社会生成の考古学』(以文社、1999年)に取り組む必要がある。

²⁸ 新原道信『旅をして、出会い、ともに考える—大学で初めてフィールドワークをするひとのために』(中央大学出版部、2011年)、参照。

²⁹ このようにいうと、多文化・多民族・多宗教の(軀轢とそれに対処したのちの)共存の諸実践から学べ、と言われるかもしれない。あるいは、弱者に、社会的弱者に寄り添う諸実践があるではないか、と言われるかもしれない。そうではあるかもしれないが、模擬授業では、NPO法人自立支援センター「ふるさとの会」での生活支援、対人支援の蓄積を紹介する予定であった。同会について

第五に、このようにみてくるならば、〈あいだ〉もしくは〈対〉を、第三者が支えるという仕組みづくりが実践的な課題であることが浮かび上がってくる。この種の領域もまた、すでに長きにわたって実践、模索されてきた事柄ではあろうけれども、個人を単位として発想するというシキタリ、「芸風」、思考の癖に馴れ親しんだアタマからは了解不能な事態であるかもしれない。先の意味での第三者には何が適切なアクターであるのか。そうした、〈あいだ〉もしくは〈対〉を支えるための、カネの流れ方の再編も含んだうえでの制度づくりに必要とされる事柄は何なのか。既成の労働の様式や既成の政治の様式からは少し離れて、《You and I want X を、第三者を巻き込んだ We need X に変換するアート・わざ・技法》³⁰として何がありうるか。これまでのさまざまな実践から学びたいとおもう。このようにすれば、制度論の媒介なき「我—汝」実存主義者³¹もたしうは治療されることになるかもしれない。

は、宮本太郎がその著『共生保障——〈支え合い〉の戦略』（岩波新書、2017年）、74-81頁、において簡潔な紹介をおこなっている。

³⁰ かつてわたしは、「正義—歴史悪・アナキズム・難死」（『現代思想 総特集：現代思想を読む 230冊』11月臨時増刊、第29巻15号、2011年、所収、108-111頁）において、「名詞としての正義でもなく、「正義に適った社会」風の正義でもなく、《正義スル》とでもいうほかない動詞としての正義を実行する政治学。巻き込まれながら巻き返し、巻かれつつも巻かれないうる者どもの政治学」として、久野収の「歴史悪」についての議論（座談会「悪について」、『久野収対話史Ⅰ』マドラ出版、1988年）のほか、鶴見俊輔「方法としてのアナキズム」、（『鶴見俊輔集 9 方法としてのアナキズム』筑摩書房、1991年）、小田実「『小田実評論撰 1 六〇年代——「難死」の思想など』（筑摩書房、2000年）について触れたことがある。いっけん平和で安逸な日常であっても、小田の言葉でいえば「難死」という限界状況でもあるかもしれないという、わたし自身の思考・見立て方の癖は、この小田の思想にかぶれているからかもしれない。

³¹ 『正義』以来、もっぱら〈ひととひとのあいだ〉に焦点を置くばかりで、制度のよしあしをズバリと問題化する方向を避けてきた。制度とのかかわりなしに、〈我—汝〉においてなにがしかの事が進捗してきたとして、すべてがおさまるかのような——逆にいえば、〈我—汝〉において決着しないかぎり何も終わらない、終わらせてはならないかのような——思考の癖にどっぷり浸りつづけてきた、と言えなくもない。“制度”と聴くと、ただちに「物象化的錯認」にほかならない、とする浅薄な思考の惰性がなかなか抜けない。

1-3. 隣人とは誰のことか？

模擬授業では、この問いかけで終えるつもりであった。しかし、すでに「模擬授業」の再演としている部分ですら簡にして要を得たものではまるっきりなく、つねにスローモーションで、具体性に欠ける、抽象的な言葉のオンパレードの様相を呈している。配布したレジュメにおいてこの問いかけで論点として突き出したのは以下の二つである。

第一に、隣人の生老病死・障老病異と、〈わたし〉の生老病死・障老病異。生老病死とは、仏教にいう四苦であるが、障老病異は、立岩真也をはじめとする「生きて存るを学ぶ」運動体が掲げる文言³²である。生存様式、生きて存るそのあり方からして異なり、ズレを孕む、ひとりひとりが、共に、たがいに、いたみ、いたわる（かもしれない可能性が既存の政治経済体制においてよりも少しは高いだろう）場合は、どのような制度によって支えられるのか。制度の支えなどあってもなくても、なければならぬ、みずからつくって凌いでいたということもあるかもしれないが³³。

そして第二に、当人じしん、さまざまなレベルで変わりつつあるという事態をおさえつつ、ひととひとのあいだ、時のあいだ、場と場のあいだで、（ブレない、のではなく）揺らぎつつしばし存続しもある、隣人と〈わたし〉という〈あいだ〉は、そのつど、どのように生まれつつあるのか。いったん成功したら、その成功経験をもとにしていけば、うまくゆくだろう、というシキタリ、「芸風」、思考やからだの癖、これらに凝り固まって執拗に手放さないでいることが、手放せないでいることが、どのような事態をもたらすか³⁴。己れが抱く〈あいだ〉のよりよきプラン・青写真が実現できないからといって、スピードを緩めることなく、

³² なによりもまず、立命館大学生存学研究センター編『生存学の企て——障老病異と共に暮らす世界へ』（生活書院、2016年）を参照のこと。

³³ 伊藤洋志『ナリワイをつくる——人生を盗まれない働き方』（ちくま文庫、2017年）は、制度に寄りかからず自前で何とかする諸実践の教本として示唆に富む。

³⁴ 「学習」の拒否としてのハラスメント——『正義』での政治学用語に翻訳すれば「僭主 tyrant」となろう——というポイントは、安富歩『生きるための論語』（ちくま新書、2012年）から学んだ。「学習」の理解についてばかりではなく、魂や「呪術としてのコミュニケーション」、呪術からの解放という論点についても示唆を得ている。

ブレることなく、プランの実現にむかってまっしぐらに能動的に走り続けることが何をもたらしてきたか。何を破壊してきたか。ひとを隣人とする具体的な所作、行為、無為(inaction)、あるいは見守り、待ち、とは？——以上のような問いかけをもって、「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学」の模擬授業を締めくくる予定ではあった。

実際の模擬授業では、「隣人とは誰のことか？」まで行きつきそうもないとわかり、急遽、最後の「隣人を隣人にする行為」ということで、「見守り」「待ち」という所作の話にふれた。誰かが「喰う・寝る・遊ぶ」ということを満喫しているとき、その誰かが勝手にできているのを、できるようになるのを見守ること、あるいは、そのようになる事態が生ずるのを待つこと。このような事柄の重要性を言挙げした。そのさいに、最首悟の「内発的義務」というアイディアを承けて川本隆史が打ち出した、「立ち入らず、立ち去らず」という言葉も紹介した³⁵。

2. 「喰う・寝る・遊ぶの政治経済学」Afterthoughts

そもそも、「くう ねる あそぶ」という動詞に着目したのはどのようなわけなのか。わたし自身の基本的な発想に立ち返り、少しばかり説明し、動詞から考えるという方法の射程も見定めてみたい。本節では以下、はじめに、基本動詞という発想について立ち返る。ついで、「喰う・寝る・遊ぶ」について、模擬授業直後に Afterthoughts として書き留めていたメモにもとづいて、この基本動詞からどのような事柄まで考えすすめてゆけるか、ゆかねばならないか、について触れておく。そうして、その先に大きな課題として何が控えているのかを、基本動詞が立ち上がる小さな場所から確認することにしたい。

2-1. 基本動詞という発想について

動詞から考えるという発想法については、出会った順序からすると、なによりもまず、花崎皋平『アイデンティティーと共生の哲学』³⁶での議論

³⁵ 川本隆史「自己決定権と内発的義務——〈生命圏の政治学〉の手前で」、(『思想』(908)第15巻33号、2000年2月号、所収、15-33頁)。

³⁶ 花崎皋平『アイデンティティーと共生の哲学』(筑摩書房、1993年)。(2001年に、増補版として、平凡社ライブ

(「人間の尺度での発展」の哲学と「人間の基本的必要」のカテゴリー分析)がある。花崎がそこで提示したマトリックスから、基本的な動詞群に着目することは人びとの生活全体を見渡すにはとてもよい視点であるということを教えられた。

その後、どのような経緯であったかは覚えていないのだが、作田啓一・多田道太郎編『動詞人間学』³⁷と出会っている。きちんと読み尽くしたわけではないのだが、さまざまな動詞群から人間に迫ろうとするアプローチに惹かれたことはいうまでもない。

時間は前後するが、マルクスについて小さな本を書くときに、辺見庸の『もの食うひとびと』での文言ともあいまって、「喰う」「食べる」ということを軸に、コミュン主義を捉えるにはどのようにしたらよいのか、におもいいたり、少しばかりの考察をほどこした³⁸。『マルクス』を準備するなかで、マルクスが『資本論』で、とりわけ当時の児童労働の酷薄さを告発しているさいに、工場の空気を問題にしているところから、大気に対して圧倒的に無力である、絶対的に受動的であるさまに——工場労働に関する報告書を読めばただちにわかる事柄であるとはいえ——留意していることが際立ってきた。息をすること、呼吸、プネウマという問題領域、である³⁹。振り返れば、心身

ラリーに収録。]花崎は、同著、258-259頁で、横軸に「価値論のカテゴリーによる必要」として、生存、保護、愛情、理解、参加、閑居、創造、自己同一性、自由、をあげ、縦軸に「存在論のカテゴリーによる必要」として、在る、持つ、行う、相互作用、をあげて、基礎表式(マトリックス)を提示する。後者のカテゴリーのうち、「在る」は名詞で、「持つ」は制度、規範、機会、道具、法などで、「行う」は動詞で、「相互作用」は場所と環境であらわされる。ここでの脈絡で重要なのは、この「行う」の軸で上げられている、膨らみと展がりのある動詞群である。

³⁷ 作田啓一・多田道太郎編『動詞人間学』(講談社現代新書、1975年)。

³⁸ 辺見庸『もの食うひとびと』(角川文庫、1997年)、65頁。[初刊は、共同通信社、1994年]「人類は頭ではだめでも、胃袋で連帯できるのかもしれない。少なくとも、食っているあいだぐらいは。もの食うひとびとの大群のただなかにいると、そう思えてくるのである。……ともに喰いながら話せば、果てしない殺しあいより、食う楽しみを取り戻すほうがいいと、胃袋で理解できはしないか。」

³⁹ この点については、拙稿「いま、マルクスとともに何を考えるべきか」、(『KAWADE 道の手帖 マルクス『資本論』入門——危機の資本主義を超えるために』、河出書房新社、2009年、所収、189-197頁)を参照。

の失調は口あるいは口元にあらわれる、という驚田清一の『悲鳴をあげる身体』での一節から問題感覚の息吹きを与えられていたのかもしれないが。その後、ある時、ある種の病、失調は、「足、耳、口」の順番で治癒してゆくことになる、という話を聞いたとき、歩くこと、聴くこと、話すことが、その病、失調の治療、あるいはそこからの回復に欠かすことができないのを知り、歩く、聴く、話す、という動詞もまた——なによりも、歩く、が最初に来る——、当たり前といえば当たりのことながら、重要である、ということに気づかされた。問題は、政治学徒として、そのことをどのように政治学の問題として捉え返すことができるか、だった⁴⁰。

このような経緯もあり、日常批判としての学という営みの一部をしめる政治学の試みを、どのように自分は演じられるのか、政治学として提出するさいに、何ができるのか。やるとすれば、やはり、生活の基本、基本動詞に立ち返るほかあるまい。そして、日々の生活をかたちづけている、微細な動きをあらためて〈問い〉として浮かび上がらせることによって、馴れ親しんできた日常風景を異様な相貌で味わいなおし——異化！——、そこからあらためて何がほんとうのところ問題なのか、そしてどのように対処できるか、に、それぞれが向かう際の基本動詞をつくりなおしてゆくきっかけを手にももらえたら、と模擬授業でのねらいを定めたのだった。

2-2. 三つの基本動詞、それぞれの様態、背景事情、場

ここでは、三つの基本動詞のそれぞれの様態、それぞれが問題となる背景事情、そして、動詞が示す事柄がかたちづけられる場についてふれておく。

はじめに様態だが、「喰いつづける、喰いすぎる、喰う、喰わない、喰えない」「寝つづける、寝すぎる、寝る、寝ない、寝られない」「遊びつづける、遊びすぎる、遊ぶ、遊ばない、遊べない」という

メモが残っている。——この論点は、それぞれの動詞に即して諸実践およびその報告などにふれることで検討してゆかねばならない大事な事柄が含まれているようにおもえる。

つぎに、模擬授業直後のメモによるとこうある。「三つの基本動詞のそれぞれの背景事情、表立っては話さなかったことがら」と。高校生向けの話ということで遠慮したのだろうか、五点が書き留められている。事柄によっては重なっているし、分節する必要も感じられないが。(1)ジェンダーと労働。(2)産み、育てるというコンテクストのなかでの「喰う・寝る・遊ぶ」。(3)看護する、介護する、面倒をみる、というコンテクストのなかでの「喰う・寝る・遊ぶ」。(4)労（いた）わる、労（ねぎら）う、働く。(5)弛み（あそび）と張り。

すでに触れたが、分節して別の論点として取り上げる必要もないようにみえる。(1)の論点は、子と親との関わりにつらなる(2)の論点と、そして、子にかざられない何かしらのケアを必要とするものとの関わりにつらなる(3)の論点を覆うものだろう。動詞に注目するという方針を一貫させるのなら、直截な概念語（「ジェンダー」「労働」）を表に出すのではなく、(2)と(3)という背景事情に立ち入り、そのことを論じてもよかったのかもしれない。

(4)の論点、語源や語用に立ち入って、いたわること、ねぎらうこと、はたらくこと、を具体的な現実に照らしつつ諸実践をみてゆくことは、とてもひとりの力だけではできそうにもない。先学が残した仕事の力を頼りにしながら触わってゆきたいところだ。

(5)の論点は、驚田の「遊びという契機」についての一節に示唆されてのことだろう。遊びっぱなしでもうまくはない。弛みと張りとのバランスがいかん、その場の軀に還ってくるのか。バランスという事柄に逃げるのは何も考えていないのと同じなのかもしれないが、三つの基本動詞に立ち返って、その動詞が重みをもつその場での弛みと張りとはどのようなものであるかを省察しなくてはなるまい。身体／軀のありよう（ひいては、世界の感じられ方、受容のされ方）にチョッケツする論点としても重要なようにおもわれるだけに、問題として登録しておきたい。「自由」という政治学

⁴⁰ その試みとして、拙稿「文庫版解題 足・耳・口の力、約束の想い起こし——ウォルツァー『解釈としての社会批判』のもうひとつの読みかた——」（前掲、ウォルツァー『解釈としての社会批判』〈ちくま学芸文庫〉、所収、202-220頁）。

の重要概念を、「緩急自在」という動きのある姿に変換して考察することにもつながるようにおもえる。

ここまでのところは、「喰う・寝る・遊ぶ」という事柄を、ある小さな場所で、いわば瞬間撮影で、切断面を切り取って掘り下げて考えるさいの方向をみてきたことになるだろうか。とはいえ、そのことと同時に、大きな事柄も、三つの基本動詞から考え抜いてみることもできるのではないか、とおもう。

そこで第三に、三つの基本動詞の場そのものも想像力の圏内に入れざるを得ないことに気づかされてくる。人びとは移動しているのか、定住しているのか（むろん、状況によっては、あれかこれか、ではないだろう）。その移動、定住にしても、脈絡しだいによっては、強制移住、強制収容のことさえある。移動もしくは移住のさいにも、逃亡・逃避なのか、避難なのか。一見平和な、とはいえ、NHKの宣言にもあるように、この国に暮らす人たちのなかにも、「くう ねる あそぶ」の次元で、日常という「平坦な戦場」（岡崎京子『リバーズ・エッジ』⁴¹）を生き延びることが問題である人たちもいるのだから、移動、定住、そのほかをめぐる、いま触れた事柄は、いつでも、どこにでもある問題でもあるはずだ。

そもそもが、動く、ということで、ひとは何を達成してしまっているのか。そのことも問題化されなくてはならないのかもしれない。遊動するさなかでできてしまっていること。さらには運搬。手ぶらであることもあるだろうけれども、何かしらのモノ、コトバ、信（便り、news）を運搬しているのかもしれない。手ぶらであっても、手ぶらのままに、何かを運搬しているのかもしれないこと。そして、そのようにして、動き回り、這いまわり、うろつき、ぶらつき、……そのことをとおして、それぞれなりの日々の生活圏域を足場固めしもするという。端的に言えば、それぞれのテリトリーづくり、あちらこちらへの往来する場⁴²。それぞれのひとにとっては、みずからが往来

する場では、同時に他の誰かと出会いもするであろうから、あるいは「喰う・寝る・遊ぶ」を共にすることもあるであろうから、その場は、さまざまな人びとが行き交う場でもあるだろう。

しかし、そもそも、そのような人びとが行き交う場が、誰に対しても開かれてあるとはどういうことなのか。どのようにして可能なのか。

2-3. 大きな課題、小さな場所からの

〈ひととひとのあいだ〉〈人間と自然とのあいだ〉に埋め込みなおして、小さな場所からものごとを見通すという先に提示した視座からみて、大きな課題として言挙げしておきたい事柄が三点ある。

第一に、汚染された自然のなかで生き延びつづける、ということ。このことにかかわる問題群は近年にはじまったことであるのではない。先学がすでに指摘してきたように、この間のさまざまな蓄積が教えてくれるように、少なく見積もっても、この国の近代のはじまりと軌を一にもしている⁴³。

第二に、見棄てられたという事態について。すでに『正義』以来、アテンションのエコノミー(the economy of attention)⁴⁴という問題については触れ

る。「私は、いわゆる“社会復帰”には、二つの面があると思う。一つは、職業の座を獲得することであるが、もうひとつは“世に棲む”棲み方、根の生やし方の獲得である。そして、後者の方がより重要であり、基礎的であると私は考える。すなわち、安定して世に棲みうるライフ・スタイルの獲得が第一義的に重要である。「働かざる者は食うべからず」（パウロ）と人はいうだろうか。しかし、安定して世に棲みえない——そのような座をもたない——人に働くことを求めるのは、控え目にいって苛酷であり、そして短期間しか可能でないことだろう。」中井久夫「世に棲む患者」、『中井久夫コレクション 世に棲む患者』（ちくま学芸文庫、2011年、所収、8-39頁）、24-25頁〔初出は、『分裂病の精神病理9』東京大学出版会、1980年〕。前註（23）でふれた「「分かち合いの自由、その共同的成就の有り-がたさ」は、この中井のエッセイに息吹きを与えられて書かれた。前註（40）の文章も、同じ息吹きのもと新しい命を与えられて書かれている。

⁴³ 栗原彬『「存在の現れ」の政治——水俣病という思想』（以文社、2005年）、大庭健『民を殺す国・日本——足尾鉾毒事件からフクシマへ』（筑摩選書）（筑摩書房、2015年）を参照。

⁴⁴ とりわけ、『正義』「II 分かち合い、分かり合い、その在り難さ・在りえなさ」「第3章 ニーズということ、権利ということ」「5 聴き届けられる権利」。『正義』88頁では、「注視の配置編制」と表現した。Elizabeth V. Spelman, *Fruits of Sorrow: Framing Our Attention to Suffering* (Beacon Press, 1997), esp. “Introduction: Suffering and The Economy of Attention”も参照。

⁴¹ 岡崎京子『リバーズ・エッジ』（宝島社、1994年）、203頁。

⁴² 生活圏域の足場固め、テリトリーづくり、あちらこちらへの往来する場、ということで、ここでは、中井久夫の「世に棲む患者」というアイディアから示唆を得てい

てはきた。大きな破局ののち、まさに当人にとっての世界そのものが破壊されてしまい、何か確かと言えるような足場、手がかり、掴みどころのような何かが底抜けしてしまうような何もない事態。その事態について何を訴えようとも、何を叫ぼうとも何の応えもかえってこない状況。呼びかけては応じられるという〈あいだ〉そのものが形をなさなくなってしまう、ただじぶん（たち）ひとりだけが問題状況のなかに放置されてしまう事態。——政治理論の言葉づかいでいえば、ハンナ・アーレントがいう（solitude ではなく）loneliness/Verlassenheit にも重なるであろうし⁴⁵、柳田國男が『明治大正史・世相篇』でいう「孤立貧」にも重なるであろう⁴⁶。見棄てられた「孤児」がどのようにしてその状況を凌ぐ「なりわい」をみつけたし、自前でやってゆけるのか。たとえば是枝裕和が映画『誰も知らない』⁴⁷で描く世界のなかでの子どもたちが生きてゆくその姿に、どのような肯定的な力をみつけることができるのか。そんなことが試されているようにもおもえる。

第三に、誰かの「喰う・寝る・遊ぶ」と、その誰かを支える別の誰かとの対（ペア）、あるいはその二人（以上）の〈あいだ〉。そして、その対（ペア）あるいは〈あいだ〉を支える第三者をあてがう仕掛け。この仕掛けを「制度」としてみるなら、どうしたらこのような「制度」をまわしてゆくことができるのか。すでに多くの論者が立ち入って論じてきていることではあろうが、わたしもまた学びほぐしてみたいとおもう。

⁴⁵ ハンナ・アーレント「エピローグ」（英語版第十三章 イデオロギーとテロル——新しい統治形式）『新版 全体主義の起原 3 全体主義』大久保和郎・大島かおり訳（みすず書房、2017 年、所収、324-354 頁）、参照。

⁴⁶ 柳田國男「明治大正史 世相篇」第十二章 貧と病「五 孤立貧と社会病」（柳田國男『柳田國男全集 第五卷』、筑摩書房、1998 年、所収、569-571 頁）。〔初刊は、『明治大正史 IV 世相篇』朝日新聞社、1931 年。〕

⁴⁷ 2004 年公開、2005 年 DVD 化。「誰も知らない」製作委員会『誰も知らない Nobody Knows』（発売・発売元：バンダイビジュアル株式会社、2005 年）。監督・脚本・編集：是枝裕和。帯より、「都内 2DK のアパートで大好きな母親と幸せに暮らす 4 人の兄妹。しかし彼らの父親はみな別々で、学校にも通ったことがなく、3 人の妹弟の存在は大家にも知られていなかった。ある日、母親はわずかな現金と短いメモを残し、兄に妹弟の世話を託して家を出る。この日から、誰にも知られることのない 4 人の子供たちだけの「漂流生活」が始まる…。」

3. むすびにかえて——労働と政治の〈現在〉史を拓く

模擬授業の再演、そしてその後の Afterthoughts を書き留めてきたが、ここでは、むすびにかえて、わたしじしんのこれまでを振り返り、棚卸しをほどこし、今後の作業工程の方向性を述べておきたい。

わたしじしん、これまで何かしらのかたちで、直截ではないにせよ、労働という問題野であったり、政治という問題野であったりについて、基本軸としては、「ひととひとの〈あいだ〉で、互いに呼びかけられては応じ（あるいは応じそこない）、応じられては呼びかける（あるいは呼びかけそこなう）、ひととひとのやりとりのプロセス（その失敗）」⁴⁸に焦点をあてて考察をほどこしてきた。その基本軸には変わりはないものの、と同時に、ひとの身体／軀の能動・受動の二重性に焦点をあてて、ひとの activity/ agency と passivity/ vulnerability の二重性も視角として据えて考察をほどこしてきた。

『正義』にせよ、『マルクス』にせよ、つねに導きの糸にあったのは、清水真砂子『もうひとつの幸福——挫折と成長』での以下の言葉だった。「^{ひと}他人に助けを請うこと、他人をたのむということはそれ自体、ひとつの非常に大切な力と考えていいのではないかと私自身はここ何年か、思うようになっているのですが……」⁴⁹。

『正義』においては、しかし、この言葉は、わたしじしんが呼びかけられ、問われ、助けを請われているという位置から、そのなけなしの言葉／コトバで、わたしに声／コエを発するひとの存在を気にしたうで受け止められていたようにおもえる⁵⁰。『マルクス』においては、これにたいし、いまは「他人に助けを請うこと、他人をたのむ」ということはしなくてすんでいたとしても、それは、たまさか、そうなりえているにすぎないことであ

⁴⁸ 『正義』、v 頁。

⁴⁹ 清水真砂子、前掲書、207 頁。

⁵⁰ 『正義』で、言葉とコトバを分けてかんがえ、後者をもって、「聴き届けられる権利」の達成の在り難さ、在りえなさを際立たせた。声・コエも、このことを意図している。とはいえ、そうした振り（分け）があらかじめ存在するわけではなかろう。事の次第についての探求は最後にゆだねたい。

って、相身互い、わたしもまた現に「他人に助けを請うこと、他人をたのむ」力を発揮しなくてはならないのだ、という風に受け止められていたとおもう。

このような感触で、自らの議論の立て方、問題感覚の癖をみなおす機会があったのだが、その後、モノや行動には依存できても、ヒトには依存できないというひとたちのこと、そのようなひとたちにとっての“適切なしかたでのヒトへの依存、信頼、「他人に助けを請うこと、他人をたのむ」力”という問題野があることを知らされた。たとえば、それまでは経済学の書物で多くを学ばせてもらっていた安富歩が、『生きるための論語』で、自身の問題への踏み込みを進め、『生きる技法』で、自立について、論じたときだ⁵¹。命題のみを掲げておこう。

【命題 1-1】自立とは、多くの人に依存することである

【命題 1】自立とは依存することだ

【命題 1-2】依存する相手が増えるとき、人はより自立する

【命題 1-3】依存する相手が減るとき、人はより従属する

【命題 1-4】従属とは依存できないことだ

【命題 1-5】助けてください、と言えたとき、あなたは自立している」

依存する相手が増えるというのは、旧い社会学での言い方に翻訳すれば、準拠集団が増えるということでもあり、依存する相手が減るというのは、逆にそうした集団が減るということである。準拠集団の数が増えるだけでは足りず、おそらく、増える集団が則る論理が別様でもなければならないだろう。いくら数が増えていっても、その準拠集団が結局は一元的な論理に則っているのであれば、大きな意味ではそれらの集団は一つの位階制秩序にしっかり組み込まれていることになり、隙間はないことになろう。そうではなく、それぞれの準

拠集団、安富の言葉に戻れば、「依存する相手」が別個の論理・感覚で生きているひとでなくてはならない。

また、頼るところが減れば減るほど、それは頼りにしている相手からの支配を受け容れ、従属させられているということになる。このこともまた、準拠集団への帰属という話でも言い換え可能であろう。

すると、大事になってくるのは、依存する相手の真の意味での複数化、多層化、ということになる。その効果として自立があるというのが安富の『生きる技法』での智慧である。

ここからみてくると、労働の場にせよ、政治の場にせよ、真の意味での自立がめざされるのであれば、それは、「助けを請う」「たのむ」という力あるいは機会の活用がどれほど当人に贈り届けられるか、になってくる。緩急自在に動きまわりながら、己のテリトリーを回遊しながら、そのテリトリーを下地にして何処かをホームにしてゆく力とでもいったらよいだろうか。さらにいえば、食物、水、大気、大地に己の身体／軀を曝すことで「喰う・寝る・遊ぶ」というプラクティスをつづけざるをえない human predicament——human nature の変わらないありよう——がいやがおうにも浮かび上がってこよう。〈現在〉が問われねばならないゆえんでもある。

⁵¹ 安富歩『生きるための論語』（ちくま新書、2012年）。同『生きる技法』青灯社、2011年。わたしじしんは、『生きるための論語』を読み、その後、『生きる技法』に出会ったため、刊行順とは違って本文でのような書き方になった。